

各國が共同しての極地觀測

(氣象及び一般地球物理學上の正確なる研究調査のため)

中央氣象臺理學博士 藤原 咲 平

世界中の殆ど全部の國が協同して行ふところの極地氣象及磁氣觀測の「極年」が此の八月一日から來年七月卅一日までの一年間續けられることになり、我國でも學界の各方面が萬端の準備を整へつゝあるが、今回文部省の追加豫算十萬圓が通過したので、問題はよいよ具體化するに至つた。世界各國の氣象學者は絶えず風の動きに注意し、觀測を續けてゐるのであるが、極地の觀測が行はれない爲め地球全體の風の動きは勿論地軸の傾斜、地磁氣等に關する正確な研究が出来ず、従つて氣象觀測上多大の困難を伴ふと同時に、地球物理學的根本理論の究明も不十分であるので、今回五十年目に第二回國際極年の事業が開始されるわけである、然らば「極年」とは何であるか？その事業計畫は如何に進められつゝあるかに就いて中央氣象臺技師藤原咲平博士に説明を煩はすことにした、(編輯)

極年は世界各國が參加協同して極地に於けるあらゆる氣象狀態や地磁氣及地軸の傾斜等に關する觀測研究を行ふもので、今回は第二回極年に當り、世界を擧げての大事業である。世界中の氣象學者は絶えず地上に於ける空氣の流動に注意し、觀測を行つてゐるが、極地に於ける狀態が不明である爲めに地球全體としての風の動きが判らず、天氣豫報にも直接影響するのである。

今回は極地の氣流は勿論、風船をあげて高層氣象をも研究して、空氣流動の收支決算をするつもりである。又氣流の動きの他、極地に於ける空中電氣、日射、極光、氷等に就いても觀測を行ふのであるが、フランス、ノルウェイ、ロシア、ドイツ、アメリカ等歐米各國は南北極地のあらゆる地點に觀測所を設け一年間觀測を續けるが、飛行機、飛行船、潜水艦、ラヂオ等あらゆる文明の利器を利用し、彼の有名なツェツペリン伯號も活動する筈である。地磁氣の本性に就いてもまだ十分に究められてゐない爲に、磁氣嵐や無線に於ける空中電氣等の現象もはつきりしてゐないし地球の地軸も年々少しづつ變動しつゝあるので、その理由をも研究しなければならない。羅針板を頼りに海上を航行する船舶の如きでも眞の北からどれだけ傾いてゐるかを知る必要があるのである。次に極光の如きも不可思議な現象とされてゐるが、之は太

陽黑點や地磁氣に直接關係があるので、之が研究も行はれる筈である。

この計畫に参加する我國は、直接極地に出かけるのではないが、富士山頂に於ける上層氣流の觀測及び樺太に於ける磁氣觀測を行ふと同時に、毎日極地からの通信によつて一年間、極の天氣圖を作製する積りである。尙ほ富士山頂には目下觀測用の半永久的廳舎を築造中であるが、觀測係主任三浦技師は富士山頂觀測の指揮に當り、豫報係の畠山技師及茨城縣柿岡にある磁氣觀測所の今道技師等は樺太に出張して磁力の検査を行ふ筈である。

黃 道 光 會 議

「極年」Polar Year (又は「極地觀測」)の一部として、純天文學上から行はれるべき事業は、報時信號と太陽黑點と、黃道光と、流星と、此の四方面であるが、其のうち黃道光に関する準備の會議が去る7月20-21日、近江の石山の柳屋旅館で開かれた。主催は天文同好會觀測部、來會者は山本一清、荒木健兒(課長)、龜井壽彦(幹事)、中村要、稻葉通義、小山秋雄、阪元鐵馬、山田長、廣瀬永次郎、佐々木一二の十氏であつた。

七月20日十四時開會。まづ課長より來集各氏の紹介あり。次いで山本會長の演説「黃道光研究の世界現勢」が約一時間あつた。それから荒木課長の觀測研究現況報告があり、ついで豫定順序により一同自動車をつらねて大津市石場の藤井天文臺を訪ねた。本會名譽會員藤井善助氏の歡待を受け、愉快を盡して十八時辭去、石山に歸る。十九時、會長招待の晚餐會。二十時半から協議會に移つた。荒木課長を座長とし、ポリー・イヤリに関する解説と觀測計畫、黃道光觀測の方法に関する研究と討議、黃道光に関する現在の學界の諸問題、會員中の黃道光觀測者の指導獎勵及び新募等々、時計が二十三時を過ぎるまで、勢田川の涼風を滿喫しながら談じ續けた。阪本氏より見せられた水晶玉の黃道光寫眞は興味の中心であつた。此の夜は諸問題を雜然と話し合つた形で、其のまゝ就寢。

翌21日朝早く古刹石山寺を訪ねた、八時朝食、九時から協議會再開、昨夜に續いて、主として觀測方法とプログラム、及び、通信發表等の形式に関する事項を、いろいろと決議した。詳細は課長より課員一同へ通知せられ、又、觀測部報として「天界」に載せられる筈。二十三時閉會。それから一同は大津を経て、花山天文臺へ來訪した。